

Topology 型統語観の紹介とその効用

田 原 薫

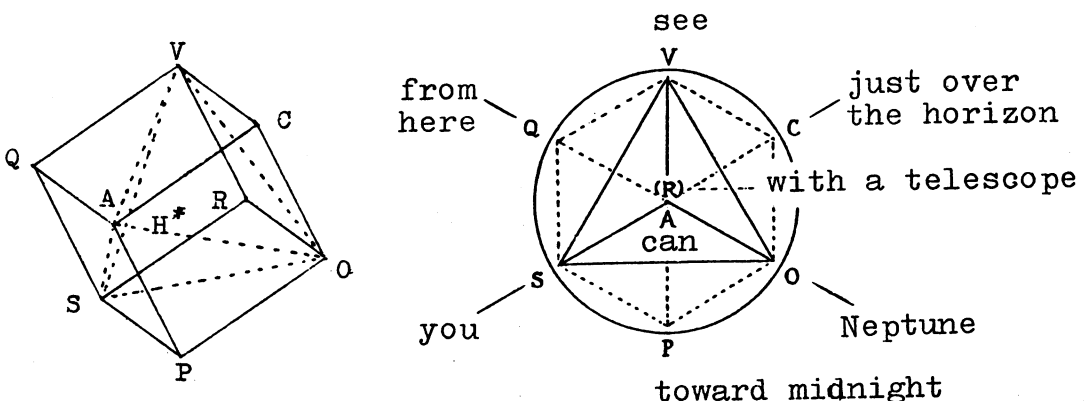
§ 0. 序 論

表題に言う Topology 型統語観というのは、文の構成成分を文法機能に従って立体的に配置し、それらが作る部分空間の意味や位置の移動等を考えることにより、文全体の意味と構造の関係を理解しようとする考え方である。意味は各個別言語の相違を超えて同一であることができる、と思われるから、この Topology 型統語観も高い程度に interlingual (言語際的) な性格をもつものである。しかし universal であるかどうかは、まだ言える段階ではない。当面、日本語と英語その他西欧の主要言語(ゲルマン系とロマンス系)をカバーして、記述的妥当性の高い文法を作ることが目標とされている。

Topology という用語は、数学でいうそれとちがって、「位置を論じること」という意味であるが、ここでいう「位置」は文の構成成分が果たす文法機能の空間的写像であり、いわゆる樹形図とは無関係である。

Topology 型統語観に属する "Global Clause Grammar" 「球節文法」では、無主題叙述文の基本的構造として、次のような立体構造を仮定し、これを "clause" と呼ぶ。図には配置の一例も示す。

図 1



立方体 $AQVCA-PSROP$ があり、その一つおきの頂点を結ぶ正四面体 $A-V-S-O$ が作られ

ている。またこの立方体・正四面体には共通の外接球が設定されている。この球面の設定は走査 (scanning) の便宜のためである。すなわち、走査にあたってはこの球面上を規則の指示に従って大圏航法で航行しつつ、各地点の成分を読み出せばよいことになる。つまり、読み出し規則はそのような指示の系として表現できる。

前記の立方体の各面を次のように名づけ、基本的にはそれぞれ次のような意味機能¹を表わすものとする。

- ①A Q V C : 「動態面」。生起或は存在する事態を表わし、否定を受けることができる。
- ②P S R O : 「名詞面」。生起或は存在する事物を表わし、指示を受けることができる。
- ③Q S P A : 「状況面」。事態が具体的に生起する際の個別的な状況・条件を表わし、英語などでは人称の呼応と時刻をもつ。
- ④V R O C : 「内容面」。具体的に生起する事態の事例から、その共通の内容を抽出して、より一般的に描出する。
- ⑤Q S R V : 「過程面」。事態が或る結果或は帰結に到達するまでに經由する、時間的或は論理的過程を表わす。
- ⑥A P O C : 「結果面」。事態が或る時間的或は論理的過程を經由して到達した結果或は帰結を表わすほか、まだ因果関係の解釈を受けない中立的な事実認定をも表わす。

以上は①②、③④、⑤⑥の、二つずつ対立する3組の概念から成り立っている。対立する概念であるから、これを平行な(相交わらない)平面の対で写像することができる。従って3組の対立概念を写像する3対の(対ごとに平行な)平面の交わりによって8個の交点(頂点)ができる。これが図1の立方体となったのである。従ってその各頂点(交点)はそれぞれの構成面から持ち込まれた三つの意味機能素性をもっている。²

上記の各面の素性をそれぞれ「動・名・状・内・過・結」と略記することにすれば、立方体の各頂点は次のような3次元の座標で定義される。また、そこに配置される成分を次のような名称で呼ぶことにする。

A (動, 状, 結)	叙動詞
P (名, 状, 結)	状況語
S (名, 状, 過)	直格語
Q (動, 状, 過)	補直語
V (動, 内, 過)	動態語
R (名, 内, 過)	斜格語
O (名, 内, 結)	対格語(対置語)
C (動, 内, 結)	補語(補対語)

以上については概略次のように考えてよい。すなわち、叙動詞は助動詞と copula。状況語は全体

にかかる時・場所・条件・結果など。直格語はいわゆる主語。補直語は主語を同格的に叙述する成分。動態語は動詞。斜格語は直格語と対格語以外に動詞が要求する名詞成分。対格語はいわゆる直接目的語と絶対格の名詞成分。補語は対格語を同格語に叙述する成分、である。

本文法では、変形文法が文の形式から出発したのと反対に、意味から出発して形式を導き出そうとする。すなわち、各語彙項目と部分空間とから、まず予建構造 (Prefabric)が組み立てられ、それが全体的な意味空間に構造挿入される。こうしてできた構造を統意構造と呼ぶ。

統意構造はさらに転送等の操作を経て統語構造へ改築される。さらにそれらの複合により統辞構造ができることもある。それらの構造に各個別言語の読み出し規則 (scanning rule)が働いて、それぞれの言語の統語連鎖が得られることになる。読み出し規則までを合体させて拡充した文法を“Global Translective Grammar”「球体転読文法」と呼ぶが、それはまだ先の目標である。

ここで、転送について一言しておく。前述の、各頂点の意味的座標から考えると、ある位置に置かれた辞項を立方体の一稜に沿って転送することは、内包する三つの意味機能素性の一つを対立素性に置き換えることに相当する。また、正四面体の稜に沿って転送することは、内包する三つの意味機能素性のうちの二つをそれぞれ対立素性に置き換えることに相当する。以上が転送の定義である。従って変形文法における「移動」とは根本的に異なる概念であることに留意されたい。

さて、以上のような方法論の枠組を使うと合理的かつ簡潔に説明できる問題がいくつかあるので、以下でそれらを拾い出し、説明を試みよう。

§ 1. 同定文と存在文

図 2 a, b, c, d を見られたい。

図 2

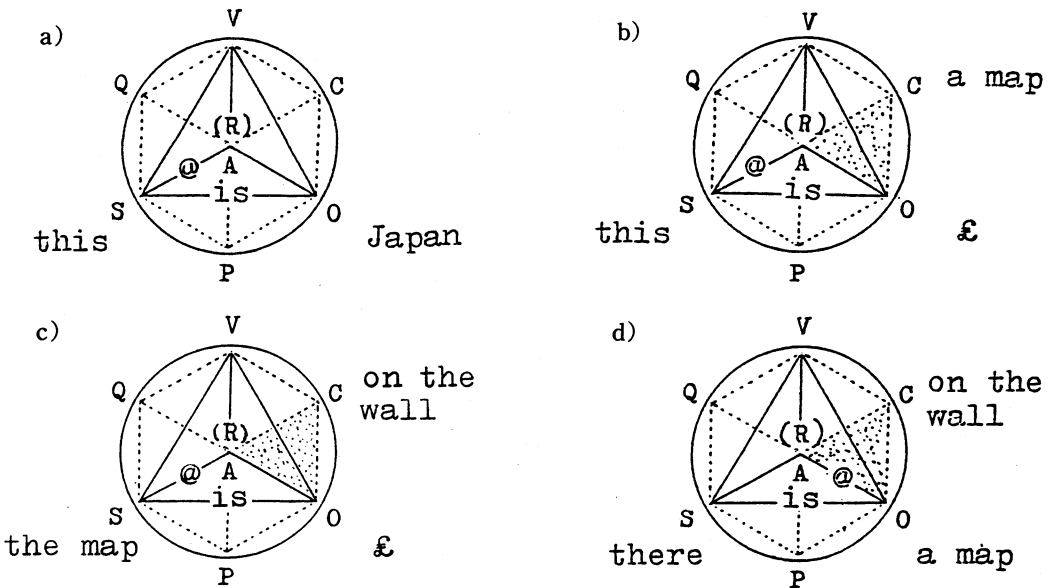


図 2 a, b, c はそれぞれ(1)(2)(3)の統語構造である。

- (1) This is Japan.
- (2) This is a map.
- (3) The map is on the wall.

これらはみな同定文に属する。(3)は一見存在文のようであるが、存在の場所を同定の対象として
いるので、やはり同定文である。これに対して図 2 d は(4)の統語構造であり、この文は存在そのも
のを報道する文であるから、存在文である。

- (4) There is a map on the wall.

さて、同じく同定文でありながら a と b は異なった構造をしており、b と c は似ている。b と c
を比較すると、c の on the wall は具象世界における存在の場所を表わしているが、b の a map は抽
象世界における存在の所属類を表わしている。従って、b と c には同じ型の予建構造(梨地)が組み
込まれている。(なお、これは d にも含まれる)。

図 b と図 c の O の位置に置かれた ϵ は「平衡子」(Equilibrator)という要素で、ここから S に転送
された成分 (this, the map) の身代りである。一見、変形文法の「痕跡」と似ているが、根本思想にお
いて異なることは言うまでもない。その意義は、直格語と補語とでは直接の叙述関係に立てないの
で、まず a の場合のように 直格語 = ϵ という関係を作り、そこで O の ϵ を C 成分で叙述させよう、
という点にある。つまり稜 SO が同値関係を、稜 OC が叙述関係を引き受けるのである。(ただし、
この ϵ には音形がない)

図 a の場合、X is Y の SAO 意味空間をそのまま裏返しにして嵌め込めば Y is X の構造が得られ
る。これは X と Y が同値関係に立つからこそ成立することであり、図 b, (2) ではこうは行かないこ
とに注目されたい。

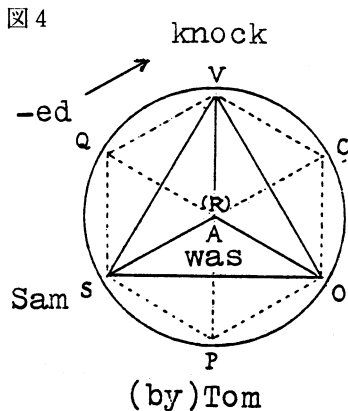
次に図 d の存在文を取りあげる。S の there は虚辞であるが、もともと初発の統意構造では S の
位置に虚辞が入っているものとする。その後ここに実体語名詞句が転送されてくれば、虚辞は取
って替られる。しかし今の場合には伝達機能上、a map は結果面から動くわけに行かない。こうして
O に留まっている名詞句は未だ格付与を受けない絶対格のものである。A の位置に置かれた is につ
いては、本文法ではこれを本動詞と見ず、(1)(2)(3)の場合と同じく叙動詞すなわち copula と考え
る。

そうすると(4)の存在の意味はどこから出てくるのか、という疑問が起るが、それに対しては
「存在格」という深層格を認め、O の a map が深層格として存在格をもっているからである、と考
える。on the wall はその O 成分を叙述しているので当然 C へ入る。ただ、O に入る絶対格(表層
上)の名詞が叙動詞 be の数呼応変化を支配する点については、形式主語 there が数の素性をもたな

語構造を走査して読み出す場合に、結果の残留に特に焦点をあてた完了相の場合を除き、Cの-edは黙読されるものとする。⁴

次に受動文の成立過程を考えよう。まず、Pに置かれた能格語が何らかの理由(表現の欲求など)でSに転送されなかった場合に、代りにOにあったSamがSに移動して来る、と考える。その際、PAVR面を対称面としてすべての辞項が鏡像化によって移動するものとする。従ってCの-edもQへ移る。またAに置かれていた-erはPのTomに吸着され、飲み込まれてしまうので、今度は叙動詞がdidにならず、wasの形を維持する。

ついでQの-edがVのknockに吸着されて過去分詞knockedの形を予約する。Tomには能格の標識のbyが付与され、こうして図4の、受動文の統語構造ができ上がる。



以上、対格言語の根底にも能格的な統意構造が潜んでいると考えることにより、能動態と受動態の関係はよりよく理解できる。それと受動態の関係はよりよく理解できる。それに、副産物として能格言語との関連も浮かび上がってくる、という利点がある。⁵

§ 3. 可欠成分を置く位置と方法

変形文法において樹形図はおなじみのものであるが、この樹形構造は元来、文が具えるべき必要条件を分析によって明らかにしようとしたものである。そしてその枝分かれのしかたを決定するのは、一般に関数項すなわち動詞であって、その要求(或は動詞のもつ厳密下位範疇化素性)によっていくつかの argument (変数項すなわち名詞句)を置く枝が派出されるしくみになっている。

ところが、広く言語を見渡すまでもなく、変形生成派の地元とも言うべき英語においても、それでは説明のつかない言語現象が存在する。すなわち動詞がその本来の要求或は能力を超えて ad hoc とも言える変数項を随えることがあるのである。

たとえば動詞 sleep は辞書上は自動詞ということになっていて、主語以外の変数項を取らない動詞の筈である。ところが次のような文が存在する。

(5) He slept off his headache. (眠って頭痛をなおした)

(6) I slept myself sober. (眠って酔いをさました)

注意すべきは、これらの例は sleep a sound sleep のような同族目的語のケースではない。また、目的語だけでは駄目で、目的語と補語が対になった、Jespersen のいわゆる nexus を従えていることである。同様の例はドイツ語にも見られる。

(7) Er ging die Füße wund. (歩いて足を痛めた)

- (8) Ich ging mich müde. (歩いて疲れた)

上記のケースの処置法として、目的語と補語をそれぞれ置く枝を設定するか、それらを nexus 或は “small clause” としてまとめて置く枝を設定することが考えられる。しかし我々の直観としては、この付加された部分はどう見ても ad hoc であるし、普通の文、たとえば I slept well. Er ging langsam. の場合に、何も置かれない枝が2本ないし1本余ってしまうのも(不完全文ということになるから)困るのである。

ここに到って我々は、文の必要条件のみを追求してきた変形文法の視点とたもとを別かたなければならぬ。すなわち、文には充分条件もまた存在するし、文法はそれを記述することもできなければならないのである。

具体的に言うと、文は内部構造をもち、そこには必要なだけの不可欠成分を具えていなければならないが、単にそれだけではない。必要に応じて可欠成分が結合できるための結合手 (bond) 或は座席を具えており、それを介して文と文 (nexus を含む) が結合して、より大きな文へ発展して行けるようなしくみになっているに違いない。思えば変形文法は、文の内政問題にはやかましいが、文どうしの外交問題には関心が薄かった。

これと対照的に、わが Global Clause Grammar では、時には可欠成分・時には不可欠成分としての外来の節が入る席は、常設の席としてすでに設けられている。序論で挙げた P と Q の機能素性からして、分詞構文はこれらの位置に入るし、C にも O の成分を補足説明する成分としての節が入り得る。もちろん節というのは nexus や、それをさらに縮約して表層的には形容詞一つになった場合を含むのであるが。

以上の考え方を前記文例(5)~(8)に適用すると、

- (9) He slept off his headache.
S AV C O

- (10) I slept myself sober.
S AV O C

- (11) Er ging die Füße wund.
S AV O C

- (12) Ich ging mich müde.
S AV O C

ここで下につけたのは位置の表示であって、O が目的語だ、などと言っているのではない。O と C に入っているのは外来の要素であるが、こういうことが有り得るからこそ、O 成分を「目的語」と呼ばず「対格語」と呼んでいるのである。たとえば(12)の mich の対格は、動詞 gehen の(厳密下位範疇化素性の)要求で付与されたのではない。O という位置によって付与されたものである。もし立体モデルの上で、これらの nexus が動詞の直接支配を受けるものでないことを明示したければ、V と O との間の稜を —||— のように切断しておけばよい。ここが切断されない You make me happy. のような構造とはそれで区別できる。

さて、上記の例では、自動詞が ad hoc に対格語と補語を取る(というよりは賓客として収容・接待する)事例を見たが、他動詞が目的語の他に、ad hoc にその補語を取る事例もよく見かける。⁶

(13) John trains the new recruits to make a living for themselves.

(14) John trains the new recruits to make a living for himself.

(15) John trains the new recruits to make a living for themselves to make a living for himself.

これらの文例は長谷川欣佑氏の論文「英文法の粹組」：『言語』1982年12月号、から採ったものであるが、(13)は《新人たちを to 以下(自活して行けるよう)になるように訓練している》のであるから、ここに可欠成分である不定詞句が出現している。

(13)に対して(14)は《自分の生計を立てるために新人たちを訓練する》のであり、ここの不定詞句も可欠成分である。しかしこれは、訓練の様相や性格を叙述するのではなく、いわば主文全体に対して外来の成分としてかかっているのであるから、(13)とは別の位置に配置しなければならない。

(15)は(13)と(14)を合成したものである。この構造を解明すれば(13)と(14)の構造も解明したことになるので、以下で変形生成派による分析と-topology 型統語観による解釈とを対照させて示すことにする。

図 5

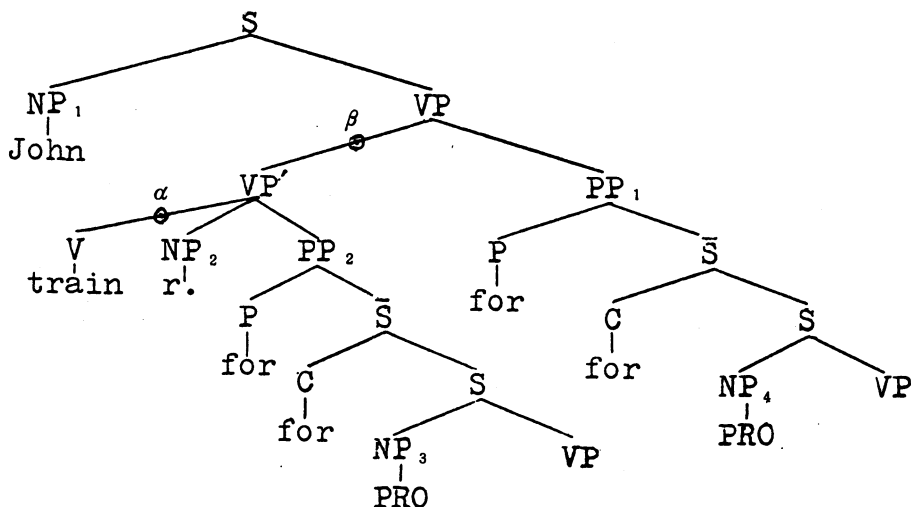


図 5 は、原論文にそのままの形では出て来ないが、その主張に忠実に従って描いた原論者長谷川氏の分析である。すなわち(13)と(14)の構造が原論文に(図式「(32), (33)」として)挙げられているので、私の方でそれらを合成したものである。ただし α と β の 2 点は、あとの説明の必要上私がつけ加えた。

どちらの PP (前置詞句)にも for が重なって出てくるが、「Faraci (1974)が示したように、共に基底構造において前置詞 for および補文化辞 for をもつ」とのことであるから、今は一応それに従っておく。ここで PP₁ と表示したのは主語 NP₁ 側の事情、すなわち《(John が)自分の生計を立てるために》を表わし、PP₂ と表示したのは目的語 NP₂ が結果として獲得する状態《自分たちの生計を立てて

ゆけるように》を表わしている。

さて、これらの PP は一体どういうメカニズムに基づいてそれぞれの位置に生じたのであろうか。

特に問題になるのは PP₂ の配置である。これは VP' 節点から枝分れしており、V と NP₂ との妹になっているが、make や cause などの作為動詞とちがって、train のもつ下位範疇化素性からは不可欠成分としての PP を置く枝は出せない筈である。事実またこの PP₂ は可欠成分(情報論的にはともかく、統語的には)である。従ってこの PP₂ の枝は動詞 train の要求によらない、ad hoc な外来者なのである。

ところで、目を PP₁ の方に転じてみると、こちらは VP 節点から分かれているが、この節は PP₁ という枝を置くためにわざわざ設定したものである。従ってこれに倣うと PP₂ の枝も、 α または β の地点に節点 VP _{α} または VP _{β} を作ってそこへすげ替えるべきではないか、という疑問が起こる。また、外来者である PP₂ が本来的な作為動詞の場合のように正確に VP' 節点にくっついて三分枝の一員を構成しているかどうかは、証明不可能である。従って、話の筋としては VP _{α} または VP _{β} への配置の方が説得力がある。

しかし、変形生成派の理論の枠内では、いずれの説にも難点がある。まず PP₂ を VP _{β} に置くのは、「NP₂ が PP₂ を c-統御 しなくなり、そうすると PP₂ の支配下にある NP₃ が NP₂ のコントロールを受けなくなって、同一指示性が主張できなくなる」というわけである。本論文は変形文法に与する立場にないので、解説は省略させていただく。

次に、PP₂ を VP _{α} に移すと、語順と格付与の面で難点が生ずる。つまり PP が動詞と目的語の間に割り込んでしまい、英語の自然な語順に反するし、格理論では V-NP の順の直接連鎖によって NP に目的格が付与されることになっているのに、その過程が障害を受けることになる。なにしろ樹形図思想では、本来別ものである包含関係(支配関係)と辞項の配列順序とを最初からワン・セットにしているので⁷、不自由さわまりないのである。

結局、PP₂ が NP₂ と V の妹として VP' 節点にくっつけられたのは、VP _{α} へは置けない・VP _{β} も駄目、という消去法によって消極的に勝ち残って来た結果にすぎない。いわばライバルの失格による不戦勝であるが、それでは自説の正しさを真に証明したことにはならず、三分岐説には依然として疑惑が残る。⁸

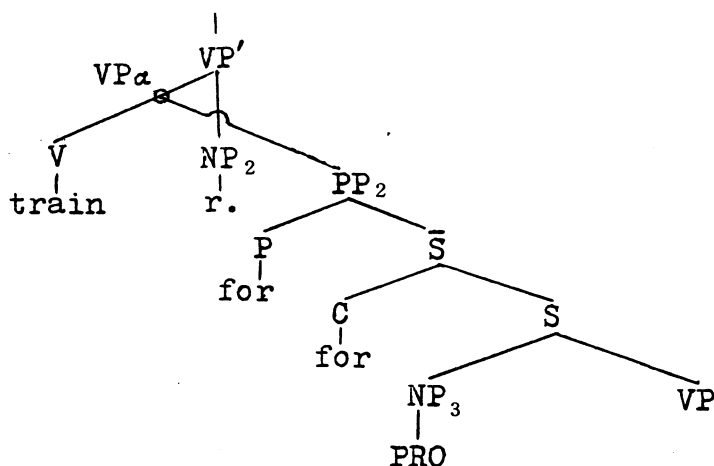
長谷川氏は言う。「正しい句構造が与えられれば、[NP₃ の] PRO が NP₂ により、[NP₁ の] PRO が NP₁ によりコントロールされるのは、一般 A-over-A 原則の必然的帰結として説明することができる。」([]内は本論文に適合するように改変した部分)

しかし、「正しい句構造」とは何であろうか。それは結局、正しい意味解釈を生み出すように、意味から逆算されて決定された構造のことである。だから、正しい句構造が与えられれば正しい意味の説明ができるというのは、当然すぎて滑稽な循環論にすぎないのである。問題はまさに、常に上

から下へ向って単語の語彙的性質だけから正しい句構造を展開派生するわけにはいかない、という冷厳な事実にある。⁸

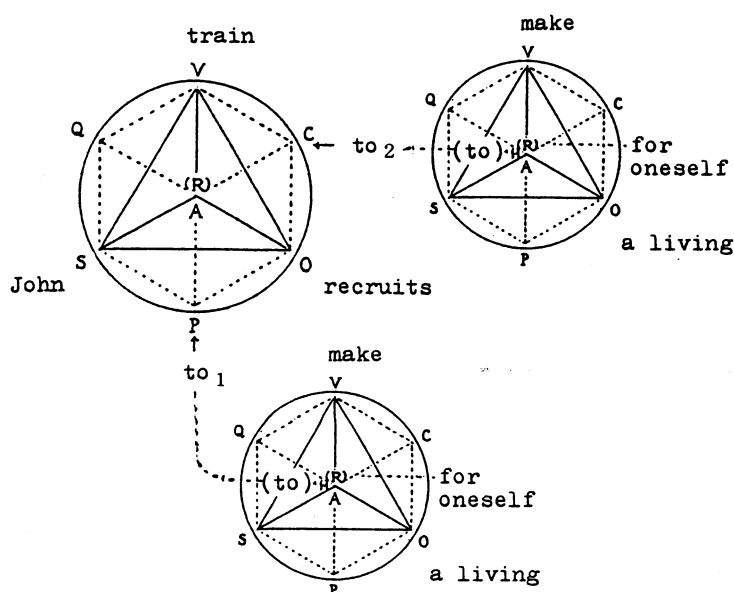
私は、変形文法の枠内で図5のVP'の枝の合理化を図るならば、問題を孕むことは承知の上で図6のようにするしかない、と思っている。⁹しかしこのように線の交叉を許すと、concatenation systemを重要な柱としてきた変形文法の枠組がガタガタになってしまう。(私は、人間の知性のためにはその方が良いと思っているのだが)。

図6



次に、Global Clause Grammar による上記(15)の構造を示すと、図7のようになる。

図7



二つの不定詞句は、サイズを縮小した立体構造として、主文のPとCの位置に接続されている。遅ればせながらつけ加えると、各立体の中心には中央司令部(headquarter) Hがあり、主張力に比

例した球のサイズの決定とか、文の資格の選択(主文にするとか、従属節にするか、不定詞句にするかといった点での)や文の名詞化を司令するものとする。従って、いわゆる補文化辞(従属接続詞等)はここに用意されているものとする。ここでは不定詞の標識の(to)がそれにあたる。行為の目標或は目的を表わす to はそれとは別に外側についているのである。

この図で、to₁ と標識した句は主語 John の意図を表わすものであるから、Q に置くべきではないか、という意見が出るかもしれない。もしこれが wanting to make a living for himself という分詞文になっていれば、なるほどその通りであるが、実はこの不定詞句は主語の意図と同時に、それが達成された後の結果を表わしている。つまり《彼は新入社員を訓練して飯を食っている》ということになるので、主文が表わす事態への付帯状況を表わす成分として、P へ置くのがより妥当と考えられる。¹⁰

不定詞句 to₂ 以下については、目標達成後の新入社員の状態を表わすものであるから、これが C に入ることはあまり問題がない。この C の成分が動詞にとって可欠成分であることを示すために、V と C との間を切っておいてもよいが、実はこの場合 to make ... は train にとって性格づけ・方向づけの役目を果たしているから、全く無関係とは言いきれない。従って私には、切らない方がよいと思われる。

以上見てきたように、この文法では、文にとっての外来者である可欠成分を、不可欠成分のみで構成される本体の形を変えないで、収容することができる。John A (= does) train recruits という本体は、小球の生起如何と関係なく終始一貫保持されていることを確認されたい。この点は、外来成分の着床によって樹形図そのものが変動する変形文法にない、本文法のメリットであろう。

※ ※ ※

以上三つのテーマの他に、興味深い問題は山積しているが、それらは別の機会に譲る。

註

1. 意味機能とは、clause 全体の意味を形成するために各部分が分担する機能のことで、各語彙項目の辞書的意味とは異なる。
2. 意味機能素性も、上記に準じて理解すべきものであり、各語彙項目のもつ意味素性(+ animate 等の)とは別ものである。
3. 受動文においては能動者は不可欠成分ではないから、(つまり by X や X によっては言わないでも済むから)能動文に比べて項の数が一つ少ない。情報論的にはともかく、統語論的には P 成分は可欠成分であり、V 成分(動詞)が要求する項には属さない。本理論では、受動文と同じく項の数が一つ少ない統意構造から、P 成分の「能格語」を S 成分に取り立てることにより、項の数を一つふやして能動文を作っている。
4. 助動詞を have とする場合は、-ed は動詞に吸着されて「音読」される。なお、過去形 knocked な

どは did-knock のような AV 重ね読みと解釈する。

5. 能格言語については下記参照,

小泉 保「能格性 ― 能格言語と対格言語」『言語』1982年11月号 P 48～56。

角田太作「能格と対格」『言語』1984年 3 月号 P 71～80。

下宮忠雄「能格早わかり」同上書 P 60～61。

6. 他動詞の場合に取り得るのは補語だけであり、新たに別の対格語を取り込むことは許されない。たとえば「コーヒーを飲んで酔いをさました」「ボールを蹴って脚を痛めた」の意味で

*I drank coffee myself sober.

*I kicked the ball my leg hurt.

などと言うことはできない。従って、ad hoc とは言ってもその ad-hoc-ness は或る秩序に支配されているのであり、それはとりもおさず clause 中の空席の問題に帰着する。これを、樹形図における真に ad hoc な枝の付加によって処理しようとするならば、なぜ自動詞文の場合(文例(5)～(8))が適格で、上記の他動詞文の場合が不適格かを説明できないであろう。

7. Chomsky, Noam: Aspects of the Theory of Syntax, M. I. T. Press, P 124～125参照。連鎖体系か集合体系かの二者択一しかないかのような発言は、知性にとって有害である。

8. 樹形図上の三分岐は、或る辞項の集合を同時に三つの部分集合に分けることに相当する。しかし集合論的には、或る一つの規準で集合の元をふるいにかけた場合、規準を満たすものと満たさないものという、二つの部分集合にしか分かれぬ。つまり一つの判定規準(或は述語)につき一回の二分岐のみが対応する。従って、三分岐以上の分岐は、動詞等の語彙的性質からそのように指定された場合以外は、ad hoc にできるものではない。意味から逆算する句構造の創作を野放しにすれば、何でも説明できることになり、変形文法は瓦解するであろう。

9. 図6においても、NP₂はPP₂をc-統御している。しかも中間に二つの節点(VP'とVP₀)を経由する点で、NP₁とPP₁の関係と相同であり、長谷川説より改善されている。NP₂はわが文法のO成分に、PP₂はわが文法のC成分に相当するが、VP₀がVP'より下(Vの近く)に位置しているのは、Cの方がOよりも位相的にVに近い(共有する意味機能素性が多い)からである。

10. このP成分 clause の意味上の主語は、特別に指定されない限り主節の主語と一致するが、それは、主節の主語がもと「能格語」としてPにあった際に、副節の方へ意味的に滲透した結果である、と一応説明することができよう。

参考文献(既出のもの以外)

なにぶん筆者の独創による新しい理論なので、理論そのものには先輩の文献は一篇もない。筆者による関連文献としては

☆田原 薫「立体読み替え文法について」『言語の世界』Vol. 2 No. 1 (1984) P 73～85が参考にな

る。いわば本理論の源流をなす初期理論であり、未熟な点はあるが文を三次元の構造体として捉え、「意味カセット」等の概念を導入して、topology 型統語観の基礎を築いたものである。

☆田原 薫「Topology 型統語観で説明できるもの」『言語の世界』Vol. 2 No. 2 (1985)。なお同誌への照会は、東京都小平市小川西町2267-15 言語研究学会へ。

対立する陣営のものとしては、いわば「掃いて捨てるほど」あるが、最近の動向を知るための最大のものとして

☆Chomsky, N.: Lectures on Government and Binding. Dordrecht: Foris Publications (1981)を挙げなければならない。なお、解説書として

☆『言語』Vol. 13 No. 11 (1984年11月号)が役に立つ。

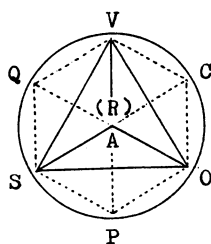
Introduction of the Topological View of Syntax, and Its Efficacy

Kaoru TAHARA

(Summary)

There can be a way of thinking in which constituents of a sentence would be assigned their proper position in the meaning space of the whole sentence figuratively given a cubic structure.

Such a tridimensional structure as shown in the figure is supposed as the interlingual basic structure common to Japanese and such Indo-European languages as English, German, French and Spanish etc. which belong to the Germanic and the Romance families.



This is the model of the expression unit which we think fundamental and we call an athematic sentence or a "clause". The grammar of each individual language should take out the chains of words as variant maps of the solid structure underlying common to those languages.

In the Global Clause Grammar, which is based on the topological view of syntax, we assume that such and such a position accommodates respectively such and such constituent(s) as follows:

A : Auxiliary verb and copula (with tense)

V : Verbal (infinitive and participle)

S : "Surrectum" (roughly, so-called subject)

Q : "Qualification" of surrectum

O : "Oppositum" (roughly, direct object)

C : Complement for oppositum (what describes oppositum appositionally)

R : "Residual" (indispensable nominal constituent other than surrectum and oppositum)

P : "Parathema" or "Peristema" (concomitant condition or circumstance: time, place, cause etc.)

Applying the topological view of syntax to the following three problems selected for example, we try to explicate them elegantly:

1. Identificational and existential sentence
2. Active and passive voice, and ergativity
3. Where and how to place dispensable constituents.

Conclusion: 1. There is a common base to both an identificational and an existential sentence.
2. A common ergative structure underlies active and passive voice. 3. A sentence must have sufficient conditions for accommodating dispensable constituents.